

大学教育センター

外部評価書

## 外部評価へのリプライ

大学教育センター長 教育担当理事 山本 義彦

外部評価の4先生が全体として、大変きめ細かに本学大学教育センターの姿を読み取って頂けたことに感謝したいと思う。とくにご心配頂いているいくつかの事柄で、当然なすべきと思われる学生意識実態調査アンケートなどが欠如していることへの厳しいご指摘は、もっともなことと心得、現在、実は学務部で学生生活実態調査原案を策定中である。比喩的に言えば、顧客の実態を知らずに、闇雲に学生に学習を要求するというのはおかしなことであるからだ。

「顧客」の日常の満足度を棚に上げてのカリキュラムいじりが決して効果的な成果を呼ばないことは自明であるから。また私たちは「教え込み」の教育から学びの協働体への価値転換を図りたいと考え、大学教育センター・工学部・情報学部で現代G P「ICT活用による実践的技術者養成」を目指して、昨年度から取組中であることを申し添える。すぐ後に述べる実用英語科目の設定もこの路線に従っている。

実用英語教育に関してのポジティブな評価には、ありがたい反面、この結果として学生の満足度がどの程度であるかを十分に調査すべきだと思う。この点、本年度12月に、はじめて全学的に英語教育を題材とするFDシンポジウムを試みたことを申し添える。

教職科目を大学教育センターが担当することは不適切、とのご指摘を受けたが、実はこれは教育学部を除く各学部の教職科目を提供する役割を果たす専門部会を設置して実施する部隊であることが必ずしも理解されなかった点で、説明不足を感じている。同様に学芸員資格に関する科目も、当センターが全部局に統一的に提供している。また今後の教職実践演習についても、教育学部をのぞくすべての学部に当センターが責任を持って提供する準備を行っているところである。

FDの取り組みにポジティブ評価を受けたことは喜んで良いのか否か、我々としては、やや不安である。というのは日常的取り組みの実態を把握しているFD委員会とその実務的課題の運営が計画的実践を伴っているのかどうか、また組織的取り組みの重要性と系統的な広がりをも求めていることがあるからである。率直に言って、FDの取り組みは、全学FD委員会の問題提起に、各部局ごと、相当の温度差があることも認めなければならない。